

柳田 泉著

『小説神髓』研究

中 村 完

『小説神髓』研究（春秋社）の刊行は昨年十一月のことであり、すでに関良一氏（日本近代文学6号）、清水茂氏（『文学』昭和42・7）の書評もあることだが、驥尾に付して、紹介の任に当らせていただく。本書は、先生の学問研究の主軸をなす「明治文学研究」シリーズの第三巻、第一巻『若き坪内逍遙』とともに、河竹繁俊氏との共著『坪内逍遙』（富山房、昭14）から発展、結実したものだ。戦争下第四巻まで刊行、中断をみた『明治文学叢刊』の構成にくらべてみると、つぎのようになる。

明治文学研究

- 1 若き坪内逍遙(既刊)
- 2 「小説神髓」研究(既刊)
- 3 明治初期の戯作文学
- 4 明治初期の文学思想上(既刊)
- 5 明治初期翻訳文学の研究
- 6 明治初期の文学思想下(既刊)
- 7 西洋文学の移入
- 8 政治小説研究上(既刊)
- 9 政治小説研究中
- 10 政治小説研究下
- 11 二葉亭四迷研究

明治文学叢刊

- 1 明治初期の翻訳文学
- 2 政治小説研究上
- 3 政治小説研究中
- 4 政治小説研究下
- 5 明治初期の文学論
- 6 戯作及び戯作小説
- 7 明治女性文学史
- 8 日本浪漫主義者の政治思想

逍遙研究の基礎がためともいふべき本書について、清水氏は、先生の逍遙に対する深い敬愛の念と、戦前から戦後におよぶ「裁断的逍遙観」に対して、正眼をすえての、厳密な逍遙文学像の設定をはかろうとする志と、この二つのわがちがいたい契機をみているが、先生も否定されたいと思う。

「叢刊」から「研究」にむかって、戦争・戦災をはさんで三十年の歳月が流れている。歴史の変転もはげしく、歴史の変転を枠づける史観の変動も常ではなかった。そういう史観の左右対極化をふくむ近代史展開は、いうまでもなく明治初年らしいものであった。先生の学問上の中心軸が明治十年代にすえられている事実には、私は先生の深い配慮をみる。歴史は、先生の眼には、はやくから、近代主義やナショナリズムを志向の極としてふくむ、それ自体、安易な解釈をゆるさぬ実体としてうつついていたようだ。「小説神髓」の咀嚼は、そういう堅固な「歴史」の咀嚼にはかなるまい。

この『小説神髓』研究』や『明治初期の文学思想』下巻の索引をよみすすむと、やがて「研究」の総体がそのまま、明治十年代文学の総合辞典になることが予測される。つまり『小説神髓』研究』は、日本の近代始動期の、可動的で巨大な底辺の把握の上にきずかれていくわけだ。さらに予測してみるなら、『二葉亭四迷研究』や、あるいは、「叢刊」の『日本浪漫主義者の政治思想』が上梓されたとき、この巨大な構造把握は、一つの視角にしばられて、より明確になるはずだ。いずれにしても、逍遙研究をはじめ明治一〇年代の研究は、今後、どんなかたちをとるにせよ、先

生のこれらの作業を前提としなければならない。

本書は、「小説神髓」の成立をささえ、内容を決定づけた要素が、全体として、伝統文学、伝統的思想よりも、よりおおく、西洋文学・西洋思想の影響によるという先生の論拠の確認としての「はしがき」、先生の提起・論証によって定説化された「小説神髓」出現の背景・動機、成立の事情と経過、材料、書き方などについて諸説の問題点を概括した「首篇」、「小説神髓」全文を現代語訳・評釈した「本篇」、「小説神髓」のとくに「小説の変遷」に影響をおよぼした『エンサイクロペディア・ブリタニカ』第十九卷（一八五九年、第八版。早大図書館蔵）所載の「ロマンス」と「近代ロマンス及びノベル」の項の大意を抄訳した「附録」、からなる。

「首篇」では、「発刊年時考」を中心に、「政治小説と『小説神髓』（昭10）」「『小説神髓』の成立」（昭13）いろいろの「小説神髓」研究の結実が、篇中の各所に貴重な見解となつてあらわれているが、なかでも、「小説神髓」の全体、部分にわたつて、この「画期的な小説革新論」のもつ「論理体系」の欠陥を集中的に検討した「書き方について」が、逍遙の思考・認識・叙述の方法にひろく深くかわつており、最も重要な章と思われる。こうした「小説神髓」の理論の欠陥に対する認識が、理論的補足として、補説的評釈を生むことになる。つまり、補足によつて「小説神髓」の欠陥が明示されるというしくみを本書がもっているわけだ。指摘・見解のとくに重要と思われるものを挙げると、理論の(1)全体にわたつて、「脈絡通徹」が不充分、とくに上巻にそれがめだつこ

と。(2)「総論」は起稿過程の最終段階で書かれ、「わりによくまとまつている」こと。(3)「小説の変遷」も、美術の本義から説きおこした「総論」に対応して、美術の起源から説きおこすべきであった、という見解。(4)「小説の主眼」において、「写真」と、「美」の関係が不明確であり、かつ、「人情模写」と、援用したジョン・モーレイの人生批評の論との不統一がめだつという指摘。(5)「小説の種類」における、ロマンスとノベルが併立・対立するという説明とロマンス変じてノベルとなつたという歴史的見方との矛盾、等々である。

美—人情—写真—人生批評の相互関係を文学論として「論理体系」にしほりきれない根本の原因を、先生は、「哲学的考察が充分といかず、美術の美についても絶対美の觀念までつきつめて考へることができずに相対的な美の程度に彷徨していたために、こうした結果となつたのではないか」と、逍遙における「美」の『想』としての把握のよわさにみておられる。先生によれば、「小説神髓」の写実理論としての欠陥は、最終的には、「想」把握のよわさによるのであつて、「小説神髓」に「想」がない、などというのは俗論にすぎない。「小説神髓」を「想」の問題を補足してうけとつたのが二葉亭の立場であるとすれば、先生は、「小説神髓」の補説的評釈を、当時の二葉亭の眼を通して試みられたことになる。

関良一氏は、先生による「小説神髓」の「短所」補足をさらに敷衍して、「短所」こそ「長所」であり、「未熟」のなかの「小説の無限の可能性」に対する積極的評価を提案しておられる。今後

の逍遙研究にとつてたいせつな視角だが、「可能性」が「あいまい」にさえぎられているかぎり、現実の確実な欠陥を補償することはできない、これは歴史の事実である。そこに、歴史的な産物としての「小説神髓」の欠陥を二葉亭の眼を通して補足評釈しなければならなかった先生の配慮があったのではなからうか。

関氏にならんで、逍遙文学の全体的容量については、越智治雄氏、前田愛氏、清水茂氏らが緻密な研究を進めているが、「壮士像」にかわる「紳士像」を仮想しながらその仮想を途中で喪失した逍遙の主体の未熟を指摘した越智氏の論考（『政治小説における『ノベル』の意味』）や、「当世書生気質」における権威主義への反撥と青春の自己解放との不ぞろい、不統一を指摘した清水氏の研究は、いちように先生の逍遙評価を起点とし、逍遙における「想」の所在を求めてつぎの研究段階に入つたものとみることができよう。

想と実の關係でいえば、定見に反するかもしれないが、明治十年代は近代国家のプランを出しあつた「想」の時代、つまり「実用」すらも「想」として、求めた時代、二十年代は統一国家機能化の段階に入つた「実」の時代、つまり「実用」への固定が、真正の「想」を要求した時代、と考えることもできる。明治十七、八年は、ちょうど、「想」と「実」の転換期であり、転換にともなつて、文学史上の断絶と連続がたがいにかくくいこんでいる時期だ。「小説神髓」における「想」「実」の相互規定のあいまいさは、時代の複雑な動きをとらえかねたかたちでの、かなり正確な反映ではなかったか。

二葉亭は「想」を文学に不可欠のものとしながら、時代の思想による「想」の充填をいさぎよしとせず文学を放棄したし、鷗外は、生活者の平衡感覚で「想」と「実」の比重を調整した。この二者と逍遙との間の「断絶」に対する理解が、先生をして「連結」の論証、つまり「小説神髓」補完の作業にむかわせたのではなかったか、私にはそう思えるわけだ。

まともでない印象的書評におちこんだが、ここで、「本篇」の紹介にもどらう。「本篇」は、先生校訂の岩波文庫本をテキストとする、批評的通釈と補足説明である。補説も、人名・作品名など不明な事項の説明という文献的「実用」の一面もふくむが、全体としては、たんなる理論的長短の指摘ではなく、通釈への意訳の挿入、説明補足の作業を通じて、逆に欠陥をあきらかにするしくみになっている。補説が概してひかえめなのは、自力本位の「歴史」咀嚼をすすめる先生の意図にもよるが、若い研究者に役だつことは何でも、と思うのは、私の勝手な願ひであらうか。

「小説の変遷」について先生は、『エンサイクロペディア・ブリタニカ』の「ロマンス」「近代ロマンス及びノベル」の二項からの影響を論じておられるが、これは逍遙自身の指摘にもとづく確実、かつ重要な指摘であつて、「小説神髓」の理論形成に援用したものが、従来、おおよその程度にしかわかつていなかっただけに、意味が大きい。先生が「附録」の抄訳を設けられた理由もここにある。

「小説の主眼」の人情模写説が、福沢諭吉の「アートをサイエンスにせよという主張」に対応する所があるのではないか、とい

う指摘も目につく。ヘーゲル哲学、スペンサーの進化論、マコーレーの文学論と歴史論、フェノロサの美術論のうち、「人情模写」成立のに関しては、なかならず「ペインの心理学」が中心的な「標準」として作用したわけで、その点、清水氏もいうように、「『心理学』の当時の日本における水準、段階、その理解の仕方などの問題についても、『ペインの心理学』とひとこと指摘されて、研究者の課題として示唆するにとどめておられる」のは、理論組織にあたっての逍遙の内部事情がある程度みてとれる箇所であり、先生のもっとたちいった説明をうかがいたいところである。しかし、「逍遙は『傍観模写』をつよく意識したあまり、さし手のあることを忘れたのであらう」というような、さりげない評言は、「人情」をもっぱら写実の対象としてのみとらえ、写実の主体と主体の側に留意すべき「想」の検討をもたなかった理論上の致命的な欠陥をおのずから鮮明にしており、「想」把握の徹底をついた「首篇」の「書き方について」とするべく対応している。また、モーレーのエリオット評（人生批判第一）と逍遙の「人情模写逼真論」との論理上のすきまにふみこんで、逍遙の「摘み上げ式写実」は「形式はサイエンス風で、合理主義的、学問的であるらしく見せるが、人間人情の真物の写実というより——ややもすると論理的総合による類型の写実に墮する方が多かるう」とし、二葉亭・鷗外の側から、類型（類想）から「個的真」（個想）への飛躍を展望しておられるのも、やはり、逍遙の「想」把握を理論形成、構造質決定の鍵とみておられるからであらう。

「小説の種類」「小説の裨益」は、具体例に即した類別が中心

であるだけに、先生の敷衍も、意訳をまじえた、通釈綿密な補説をもつて、「小説神髓」の混濁した豊富を選別し、問題点をとりおさえている。

下巻も、全体として、具体的な「小説作法」論であるため、先生の通釈は論に即して直訳にちかく、補説は逆に上巻にくらべて、いっそう柔軟な理論的補修の役割をはたしている。要点だけを述べると、「文体論」では、初出の「小説の文体」（明治16・9）が矢野竜溪の「小説文章論」に対立して「人情模写の文体」を強調しながら、文体例検討の段階までいかなかったこと。「脚色の法則」では、逍遙における「野鄙猥褻」の限定のしかたからおして、「人情」がいくら近代的爱愛観に染色されているにもかかわらず、「猥褻」への極度の反撥を通じて、逆に倫理的拘束にとじこめられているという指摘。「主人公の設置」では、「惡醜を書くことの自由」を公言する一方で、「良主人公」設定の必要を説くという指摘、等々、いずれも逍遙の人生認識・文学認識の根本形式にかかわる重要な論評である。

こういう指摘を恣意に概括すると、逍遙は「小説神髓」の理論組織にあたって「哲学的考察」を欠き、「美醜」「善惡」を「想」の次元に組み上げず、つねに現実の相対的關係にひきまどしたと、先生が逍遙の限界を一方的に論証されたかにも見えるだらう。決してそうではない。評釈の論理過程をたどりなおしてみると、逍遙が「現実」に応じて「想」の内容を相対化する一方で、内容はともかく、「想」そのものを用意していたこと、その逍遙なりの「想」の用意の上に、理論の豊富と貧困を同時にふくむ「小説

神髓」の多元的構造がきずかれたこと、そのことを先生は論理の二重設定によって入念に説明しておられる。「跋」にみられるような自省から再出発した逍遙は、「小説神髓」以後の作業を通じて「ヴェロン、二葉亭をとり入れ、小説即美術の立場は全くすててしまつてはいないが、漸く小説の極致を美術の美から、真理の真に調和させる思想が出て来た。真が極致となるに及んで、逍遙の『神髓』の美術思想は、一応二葉亭の真理思想に座を譲った」かたちになる。

逍遙が可能性として提出したものと、二葉亭が事実として創造したものとは、二葉亭の側からの補足、つまり「連続」への懷疑と「断絶」克服の情熱とを媒介としてつながる。先生は、「小説神髓」と「小説総論」の關係について、「断絶」の入念な論証を通じてその「連続」を論証された。近代文学の全過程も、みせかけの連続の底部に、そういう断絶を横たえているのではないか。本書は、柔軟な相貌のうちに、そういうアイロニイをふくんでいるようだ。正確にいえば、これは先生が、「実」の制約とひきかえに「想」をあらがった近代文学論成立の事情をアイロニイとしてうけとっておられるということでもある。文学的アイロニイは昭和十年代のみの産物ではない。史観の適用は一種の消化作用である。つねに「歴史」の咀嚼を前提とすべきであろう。読みおえて本書のおもさがいよいよよくわわった感じである。

執筆者紹介（五十音順）

杉崎重遠	明星大学教授
谷協理史	跡見女子大学講師
中野三敏	淑徳女子短期大学講師
橋本達雄	跡見女子大学講師
福島秋穂	大学院在学
三谷邦明	学園高等学院講師
築瀬一雄	豊田工業高等専門学校教授
山敷和男	大学院在学